

学内での活動

1 IAMAS ARTIST FILE 事業担当・出展作家

IAMAS ARTIST FILE #10「繭／COCOON：技術から思考するテクノロジー」の企画担当および、参加作家(florian gadenne + miki okubo)として、1月10日から3月9日の展示を実施した。会期中のメンテナンスにも尽力した。ギャラリートーク(1月11日)に参加、アーティストトーク(3月8日)に登壇した。また、成果冊子の責任編集を務め、その成果をウェブに公開した。紀要にも特集記事を執筆した。また、IAMAS レポートとして、展覧会報告も掲載された。



2 アーティスト／リサーチャー・イン・レジデンス 2025 事業担当

第一回のAiR 事業担当として、滞在期間である8月から11月まで、招聘アーティストのジダーノワ・アリーナ氏をサポートし、キックオフ上映会、ワークショップ、オープンスタジオ、アーティストインタビュー、成果発表展の全てに関わった。それに加え、その広報にも尽力し、活動報告冊子の責任編集を務め、寄稿文を執筆した。



3 プロジェクト授業「テクノロジーの〈解釈学〉」

研究分担者として、参加者がテクノロジーの思想についてより幅広く理解し、自らの芸術表現における技術についての考えを得られるよう尽力した。技術哲学、技術論、テクノロジーの思想を議論した。今年度の輪読では、『ベルナル・スティグレールの哲学—人新世の技術論』(李 2022)、『テクノロジーってなんだろう』(小林 2025)を読解し、自身の専門の観点から解説した。宇佐美達朗氏による技術論講義(12月24日)、三原聡一郎氏の作品《空気の研究》を再制作中であり、研究会を実施した。



4 メディア表現学研究会特別講義

- Jean-Louis BOISSIER, Béatrice Selleron, 竹内創(2月10日)(digital)Soba Choko
- Tania RUIZ(4月28日) Arts in the public realm – artistic expression, public space and culture
- 梶村昌世(6月16日) 表現者の姿勢—オーバーハウゼン短編国際映画祭より

上記3つのメディア表現学研究会特別講義を企画し、開催した。



5 紀要原稿の執筆（研究ノート・批評・レジデンス事業報告）

展覧会「石に話すことを教える」（2025.03.15-03.30、瑞雲庵、京都、および、2025.12.12-12.27）の実践を踏まえた研究ノート、および、赤松正行《タレスの刻印》についての批評を執筆した。また、IAMAS アーティスト／リサーチャー・イン・レジデンス事業担当として、展覧会の記録についての寄稿を担当した。

6 サブプロジェクト「ファルマコン:現代社会における〈毒〉の重要性」

テクノロジーの〈解釈学〉プロジェクトのサブプロジェクトとして、「ファルマコン」（毒＝薬、捧げ物）というテーマを、技術の観点から深めた。『ポワゾン・ルージュ 6』にはテクノロジーの両義性をテーマとした論考を執筆した（刊行は2026年3月）。

7 IAMAS ガムラン部

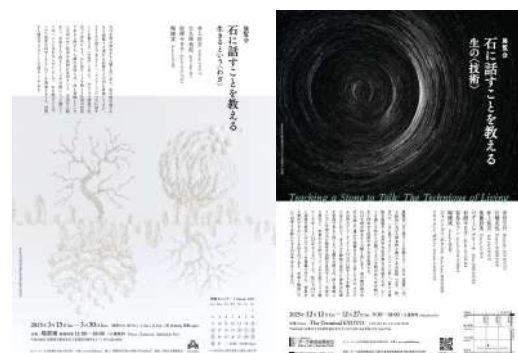
ガムラン部の顧問として、学生と共に定期的な練習に取り組み、OPEN HOUSE 2024 での演奏や、国際交流イベント「ハローぎふ・ハローワールド 2025」（メディアコスモス、岐阜、10月25日）に参加した。演奏機会をとらえ、ガムラン音楽を広めることに貢献した。



学外での社会活動

1 展覧会「石に話すことを教える」企画・キュレーション

3月15日から3月30日（瑞雲庵、京都）で井上佑吉氏の彫刻作品《Mille et une têtes》を紹介し、石と向き合い表現することをめぐって生きる〈わざ〉について思考する展覧会を実施した。同年12月12日から12月27日（The Terminal KYOTO、京都）で、生の技術を多角的に思考するアーティスト10人の作品で構成される展覧会を実施した。美学的研究で取り組んでいる技術論と生命論の架橋に関して、芸術実践を通じて考える重要な活動である。対談はウェブサイトアーカイブする予定。二度の展覧会をまとめた記録冊子もウェブサイト上で公開予定。 Website : <https://artsensibilisation.com>



2 日本記号学会第45回大会「繭の記号論」実行委員長

7月5日・6日はIAMASで日本記号学会大会を開催し、実行委員長を務めた。テーマは技術をめぐる倫理・芸術・哲学。IAMASの建学の理念に深く関わる科学技術と芸術表現の融合への問い、メディア



アートを含むテクノロジーに関わる芸術表現の現代性について議論した。また、IAMAS ギャラリーと4階で展覧会「繭の記号論」を開催し、自身が企画に関わった二つの展覧会のほかに、学会員の作品、IAMAS 現役学生の作品の一部を紹介することができた。

研究発表では、「展覧会「すべてのものとダンスを踊って：共感のエコロジー」批評——エコロジーアート受容を深化させる新たな「共感」理解」、セッション登壇では「繭のコスモロジー：共感・転生・混合をめぐる技術哲学的試論」を発表した。



3 「藝術と技術の問い」講座 第二回「展覧会とは何か」登壇

藤幡正樹氏がエグゼクティブ・ディレクターを務める「藝術と技術の問い」(DAT, <https://www.dat.1kc.jp/lecture>)に登壇し、Les immatériaux(1985)を含む重要なメディアアートの国際展について、展覧会の存在論を明らかにし、これからの芸術展のあり方、日本の文化的脱植民地について講義した。



4 「新しい倫理を作る」登壇 講演

埼玉大学で開催された研究集会「新しい倫理を作る」に登壇した。

「倫理は人類のものか? : 非人間存在への「共感」を思考するキュレーション」を発表した。この研究集会は『埼玉大学教養学部 リベラル・アーツ叢書 19 新しい倫理をつくる』として現在編集集中であり、本発表に基づく論文が掲載予定。



5 9th Mediterranean Congress of Aesthetics (Çanakkale) 口頭発表

2025年9月16-20日、トルコ・チャナッカレで開催された第9回地中海美学学会に参加し、Rethinking General Organology for an Aesthetics of Empathyを発表した。技術を人間特権から解放し、エマヌエーレ・コッチャの「浸り」「繭」の概念とベルクソンに起源をもつ一般器官学を接続して、非人間的な存在へ開かれた共感概念の再定義を提示した。



6 パリ第8大学 AI-AC TEAMeD 研究室訪問

近年の研究(身体意識の変容、メディアを介した自己表象、拡張された共感論)を報告し、来年度以降の共同研究の可能性について議論した。また TEAMeD の近年の国際的な共同研究の計画、相互招聘、学生の短期受け入れに関する状況について調査した。

7 きょうと視覚文化財団 展覧会支援 助成採択

展覧会企画「生きるという〈わざ〉：石、木、土」は、石（鉱物）・木（植物）・土（微生物から生体まで）をめぐり、生に内在する多様な〈わざ〉について異なる素材と向き合う作家の表現を取り上げる。視覚文化に関する新しい挑戦として、(A)見えない物語の可視化、(B)身体的（多感覚的）に鑑賞する視覚文化、(C)生成技術×エコロジーアート×視覚芸術の交差の3つの観点から視覚芸術の枠組みを拡張する表現を探究する。開催は岐阜県内にて 2026 年度内の開催を予定している。

8 日本記号学会第 45 回大会 理事

25—27 年度の日本記号学会大会の理事として活動し、実行委員長経験者として学会運営に貢献している。叢書の責任編集も務める。

9 ZINETONIC 講演

大垣市内で開催されたジンのイベント ZINETONIC に登壇し、「異文化需要の美学」を講演した。ロラン・バルトの『表徴の帝国』を例に、日本文化表象とその受容・変容・逆輸入のあり方を考えた。



10 岐阜市文化芸術推進審議会

令和 5-6 年度に引き続き、学識経験者として委員を引き受け、文化芸術の推進に関する事項についての調査及び審議について、積極的に意見交換に参加し、文化芸術推進に尽力している（任期令和 7-8 年度）。

11 対談 大久保美紀×吉岡洋

3 月 15 日、展覧会「石に話すことを教える 生きるという〈わざ〉」のオープニング企画として、哲学者の吉岡洋氏と対談を行った（<https://www.youtube.com/watch?v=c1QUhQe1qh0>）。その内容は、IAMAS 紀要 2025 に寄稿した研究ノートの付録として編集した。



12 対談 大久保美紀×福原志保

12 月 27 日、展覧会「石に話すことを教える 生の〈技術〉」のクロージング企画としてアーティストの福原志保氏と対談を行った。その内容は編集中の展覧会図録等に掲載を予定している。

2025 年度業績リスト（採択、企画、作品発表、学会発表、出版）

採択

芸術文化振興基金 美術の創造普及活動 石に話すことを教える：生きるという〈わざ〉

ポーラ美術振興財団 国際交流助成 石に話すことを教える：生の〈技術〉

吉野石膏美術振興財団 国際交流助成 石に話すことを教える：生の〈技術〉

朝日新聞文化財団 展覧会助成 石に話すことを教える：生の〈技術〉

企画

IAMAS ARTIST FILE #10 繭／COCOON 技術から思考するエコロジー 2025.01.10－03.09 岐阜県美術館、岐阜

石に話すことを教える：生きるという〈わざ〉 2025.03.15－03.30 瑞雲庵、京都

日本記号学会第 45 回大会関連企画 展覧会「繭の記号論：技術をめぐる倫理・芸術・哲学」 2025.07.05－07.06
IAMAS、岐阜

石に話すことを教える：生の〈技術〉 2025.12.12－12.27 瑞雲庵、京都

作品発表

IAMAS ARTIST FILE #10 繭／COCOON 技術から思考するエコロジー

2025.01.10－03.09 岐阜県美術館、岐阜

« L'Arbre-Monde »（インスタレーション、florian gadenne + miki okubo として）

学会発表

大久保美紀、単著、研究発表、展覧会「すべてのものとダンスを踊って：共感のエコロジー」批評——エコロジーア
ート受容を深化させる新たな「共感」理解、日本記号学会第 45 回大会、情報科学芸術大学院大学、岐阜

大久保美紀、単著、セッション登壇、繭のコモロジー：共感・転生・混合をめぐる技術哲学的試論、日本記号学会
第 45 回大会、情報科学芸術大学院大学、岐阜

Miki OKUBO, Rethinking General Organology for an Aesthetics of Empathy, 9th Mediterranean Congress of Aesthetics,
Çanakkale

出版

Miki OKUBO、単著、査読有、Art décolonial 査読有り、n° 43 Figures de l'art - Art & décolonialité

大久保美紀、単著、石に話すことを教える：生に内在するものとしての「技術」、IAMAS 紀要 2025

大久保美紀、単著、赤松正行《タレスの刻印》：墨流しの技法、あるいは不確実性を生きる芸術、IAMAS 紀要 2025

大久保美紀、共著、特集 IAMAS アーティスト／リサーチャー・イン・レジデンス 2025、IAMAS 紀要 2024

大久保美紀、寄稿、ジダーノワ アリーナ「言葉のない手紙」、アーティスト／リサーチャー・イン・レジデンス 2025 成
果冊子

大久保美紀、単著、生命の分泌物としてのテクノロジー、『ポワゾン・ルージュ vol.6』（テクノロジーの〈解釈学〉プロ
ジェクト・サブプロジェクト「ファルマコン：現代社会における〈毒〉の重要性研究」成果報告冊子